

「変えられた負の烙印」
(ヨハネによる福音書4:5-42)

もしかすると、今日の福音書は長いな、と感じられた方もおられるかもしれませんが。今日の福音は主イエスとサマリアの女性との出会いのお話でした。人が誰かと出会うには、時間が必要です。それゆえ、今日の箇所は必然的に長いのだと思います。

今日の場面は、言ってみれば井戸端会議です。井戸端会議と言うのは、最近あまり目にしなくなりましたが、わたしの小さな頃はまだあって、小学校からの帰り道でいたるところでご婦人方やご隠居さん同士が「この人たち、いつから話しているのだろう？」ってくらい話し込んでいたりしたことを思い出します。でも、そうやってご近所との密接な関係が作られていたのかなと今は思います。サマリアの女性も、井戸端でイエス様と語り合っていくなかで、真の意味で、イエスさまと出会うことになりました。

主イエスはユダヤからガリラヤへ向かう旅の途中です。最短ルートはサマリアを通るルートですが、当時のユダヤ人はサマリア人との交流を避けていたので、サマリアを避けるのが普通でした。しかし、今日の直前の箇所に主イエス一行が「サマリアを通らなければならなかった」とあるように、主イエス一行は神の計画によって、サマリアルートを歩まされたのです。主イエスとサマリアの女性との出会いは、神様によるものだった、ということです。

当時、ユダヤ人たちはサマリア人のことを異邦人の習慣や宗教の影響を受けた墮落した人たちだと蔑んでいました。ユダヤ人にとって聖所はエルサレムであり、サマリア人たちが他の山で祈っていることも許されざることでありました。神はそのサマリアに主イエスをわざわざ行かせ、サマリアの女性と井戸端で出合わせるのです。そして、主イエスは彼女に水を求めます。しかし、彼女にとってはまだ、目の前の男は自分たちを差別するユダヤ人の男の一人に過ぎません。ですから、皮肉たっぷりに「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか。」と言います。しかし実は、この女性の皮肉たっぷりの言がとても大切なのです。水をください、はいどうぞ、では、それで終わりです。しかし、彼女はそこで主イエスに物申したわけです。長い井戸端会議がこれにより始まることになる。つまり、イエスとの出会いがこれにより始まるのです。

主イエスは応えます。「もしあなたが、『水を飲ませてください』といったのが誰であるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」主イエスはさっきは自分から水を求めたのに、今度は、自分は水を与えることができる、というのです。何とも変

な会話です。女性もやはり理解できない。しかし、ここでも女性は会話を辞めません。女性はさらに応えます。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。あなたはわたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」女性としては、この人は水を与えているが、水をくむ道具も持っていないじゃないか、と言い、さらに、この井戸はヤコブから伝わる井戸なのだから、自分が水を与える、などということは、自分はヤコブより偉いとでも言うのか？と言いたいわけです。これにイエスは応えます。「この水を飲むものはだれでもまた渴く。しかし、わたしが与える水を飲むものは決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」ついに、この主イエスの言葉が彼女に刺さります。彼女は応えます。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」明らかに彼女の中で変化が起こっています。「どうして？」という問いから、「水をください」という求めへと女性の応答が変わったのです。どうやらこの人は何か特別な存在らしいと気づき始めています。さらにこのあと、主イエスは、この女性に5人の夫がいた事、しかし今連れ添っているのは夫ではないことを言い当てます。彼女は驚き、この人は預言者に違いないと考えます。しかし、まだ主イエスが救い主だということはわかっていない。ここでも彼女は問うことをやめません。ユダヤ人とサマリア人が争っていることの一つ、まことの礼拝はどちらの山で行なわれるべきかを尋ねます。これに対する主イエスの言葉も意外でした。「サマリアでもエルサレムでもない所で礼拝する時が来る。しかも今がそうだ」というのです。これを聞いた女性はついに確信に迫ります。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることを知っています。」彼女は内心、「もしかしたら、この人が」と考えていたのかもしれない。主イエスは言います。「それは、あなたと話しをしているこのわたしである」。彼女は、イエスとの会話に留まり続けることで、ただのユダヤ人の男の一人に過ぎなかった目の前の男が、まことのメシアであることを知った、つまり主イエスとまことに出会ったのです。主イエスとの出会いは、主イエスとの関係に留まることで起こるのです。しかし、どうして、彼女はこれほどまでに、主イエスとの会話に留まったのでしょうか。

それは、彼女が渴いていたからに他なりません。彼女は二つの負の烙印を押されていた存在でした。ひとつ目の烙印は、ユダヤ人から蔑視されていたサマリアの女性であったこと。そして、もう一つ。彼女が井戸に水をくみに来ていたのは正午ごろです。通常、井戸の水くみは朝と夕方の仕事です。恐らく彼女は、同じサマリア人の村の女性達に会いたくなかったのでしょう。なぜなら、

彼女にはかつて五人の夫がいて、今一緒にいる男は夫ではない。村の人々から胡散臭い目で見られていたのでしょう。つまり、彼女はユダヤ人からも、サマリア人からも負の烙印を押されていた存在であったのです。しかし、その負の烙印こそが、主イエスとの出会いのきっかけになるのです。「なぜ、ユダヤ人のあなたがわたしに水を求めるのか」という彼女の始めの問は、サマリア人としてつけられた烙印ゆえの問です。これにより、彼女と主イエスとの会話は始まります。そしてもう一つの烙印、五人の夫と、現在の男のことを主イエスが言い当てたことで、彼女の主イエスへの見方がグッと変化するのです。こうして、人によって押された負の烙印こそが、イエスとの出会いへ導くものとなる。彼女は、ずっと渴いていたのです。しかし、その渴き故にいまそれらの烙印はイエスによって変えられ、渴きは癒やされました。まさに、命の水、永遠に枯れることのない水を注がれたのです。

主イエスとの出会いは、この女性のように、主イエスとの関係に留まることで起こります。今日の福音では、疲れたイエス様がサマリアの女性に「水を飲ませてください（7節）」と声をかけられることで会話が始まりました。渴き、負の烙印を押された者として生きていた女性にとって、「水を飲ませてください」という言葉は「あなたに助けてもらいたい」、「あなたが必要なんだ」という言葉にほかなりませんでした。ここに主イエスの「愛」があります。サマリアの女性は、主イエスに声を掛けられたことで、自分が生きていて良いのだと思えたに違いありません。主イエスに必要とされることで彼女は生きる力を得ました。そうして彼女は、今日の福音の最後にもある通り、主イエスの福音を述べ伝える者へと変えられました。

「水を飲ませてください」と主イエスはわたしたち一人ひとりにも語りかけておられます。主イエスはわたしたち一人ひとりを必要とされておられます。その主イエスにサマリアの女性のように留まりましょう。み言葉であるイエス様が、わたしたち一人ひとりの中に留まってくださいます。そのみ言葉を、こりや意味がわからん、とポイッと放ってしまえば、そこで関係は滞ってしまいます。しかし、今日の福音では彼女は決して会話をやめませんでした。自分自身の疑問を、渴きを訴えました。そして、主イエスと出会い、渴きは癒され、負の烙印が、神の栄光を表すしるしへと変えられました。わたしたちもまた、疑問があるなら、負い目があるのなら、苦しみ、渴きがあるのなら、それを主イエスにぶつければ良いのです。そうすることで、その関係の中で、必ずわたしたちのうちに宿っておられるみ言葉なる主イエスとの出会いが訪れます。その時、わたしたちはサマリアの女性がそうであったように、その喜びを伝える者へと変えられます。主イエスと出会い、変えられながら、その愛を伝えるものとして歩いていくことができますように。願い求めながら、礼拝を続けてまいりましょう。